第195号

お元気ですか

発行所・（福）横浜市社会福祉協議会
障害者支援センター
〒231 横浜市中区桜木町1丁目1番地
-8482 横浜市健康福祉総合センター9階
ＴＥＬ045(681)1211・ＦＡＸ045(680)1550
http://www.yokohamashakyo.jp/siencenter/
編集発行人・内嶋 順一

2021／9

地域の方との触れ合いを大切に
～区役所花壇に花苗を～
ＮＰＯ法人雑貨工房みらい

鶴見区内で花の仕入れや販売、割りばし細工などをしている雑貨工房みらいと雑貨工房大地は鶴見区役所の入り口に置かれている花壇に、三か月に一度の頻度で花苗を植えている。

きっかけは…

区役所で行われるバザーや販売会に参加していた時、区役所の職員の方から声をかけられたことが始まり。「日頃から、花売りをしていることを知ってもらっているからこそ、ご紹介いただけた。とても嬉しいことです。」と職員さんは話してくれた。

区役所到着後はじめにすることは、今植えられている花苗を抜き取ること。水やりにも来ているが、枯れている苗も多い。「花壇の縁に空き缶やたばこの吸い殻が置かれていることも多い。たばこの吸い殻が捨てられると花は枯れてしまう。」と悲しそうに話された。

その後、土を掘り返し柔らかくしたところに新しい花苗を植える。今回植える花苗はベゴニアだ。夏の暑さにも強い品種で、彩りも美しい。ポットから花苗を抜き取り花壇に並べられる。「次は白色ください」、「はい」とみるみる花壇に鮮やかな苗が植えられていく。メンバーさんと職員さんの息もぴったりだ。

おそろいのエプロンをつけて作業します

取材したこの日も蒸し暑い日だったが、メンバーさんたちは汚れないように長袖長ズボン、手袋をしての作業。午前中ではあるが、重労働だ。

区役所を利用する方や、通りかかりの方から、「暑い中、ご苦労さま」と声をかけられる。「ここで作業していると区役所に来た方々によく声をかけられます。たまに道を聞かれることもあるんです」と大地の田倉所長は話してくれた。地域の方からのこんな声かけもメンバーさんにはとても嬉しいことだろう。この日は一時間半ほどで二四〇ポットを植えた。

知ってほしい！

区役所花壇は地域の作業所が植え替えていることを知ってもらいたい、という思いから、花壇には手作りの看板も置かれている。「作業している様子、水やりに来ている様子を地域の方に見てもらうことで、鶴見区にはこんな作業所があるんだと知ってもらえれば。同じ地域に障害のある方も生活しているんだと思ってもらえることで、彼らがより生活しやすい社会になると思う」と吉澤理事長も話してくれた。

今年で二年目となるこの作業。暑い夏も寒い冬も、地域に出て働く彼らをこれからも応援したいと思う。

柵もつけて完成！

望遠鏡

高次脳機能障害の方と関わるようになって四半世紀、たった二十五年の間に彼らを取り巻く環境が大きく変化しました。もともとは戦傷者に対する医学的リハビリテーションの中で高次脳機能障害はリハビリテーションの阻害因子と捉えられていましたが、紆余曲折を経て平成十六年には行政的に障害を定義し、支援の対象として認識されるようになりました。目まぐるしい変化に対し、どのように支援の質を担保してくのか試行錯誤の日々です。そしてコロナ禍の今、これまでと同様の支援が難しくなり、新たにオンラインでの面談や利用者同士の交流会などを取り入れました。その時々に合わせた手段の選択は容易ではありませんが、周囲の方の助けを借りながら挑戦を続けていく毎日です。

（特定非営利活動法人
脳外傷友の会ナナ
野々垣 睦美）

障害者後見的支援制度
あんしんサポーター活動を振り返る パートⅠ

定期的に、登録者やその家族と後見的支援室（以下「支援室」）でお会いしたり、登録者の日中活動や暮らしの場などにも訪問するあんしんサポーター（以下「サポーター」）。サポーター活動を通し、喜びも得られるが、戸惑いや悩みも生まれてくる。それらを全区の支援室スタッフで共有し、サポーター活動の更なる充実を目指し、六月十八日に報告会を開催（八十六名が参加）。六名のサポーターが想いを語った。

率直な想いが語られた報告会

日々、勉強中

四月に採用され、前任者からの引継ぎ中の『つづき障害者後見的支援センターリリーフ・ネット』の高山さん。ある登録者の『つながりがあって今がある』という言葉が心に響いたという。「地域でのつながり、助け合いの輪を広げていくことができれば、一人一人が暮らしやすくなるのではないか。そのために、まず、先輩の仕事の姿勢を参考にしながら、登録者に信頼されるサポーターを目指していきたい」と語る。

また『栄区後見的支援室とんぼ』の石井さんも四月から仕事を始めた。先輩の面談に同席し、登録者の表情や話し方から、体調や気持ちの変化を把握している様子を何度も目にした。石井さんは、登録者との信頼関係を築くまでに、小さな積み重ねがたくさんあり、その上に今があると実感した。「支援室の一員として頑張らないといけないと思うと不安になるが、様々な経験を肥やしにし、起き上がり小法師のように頑張っていきたい」と語った。

これからの抱負を語る高山さん（左）と石井さん

信じる心を大切に

『中区後見的支援室らるご』の牧野さんは、支援室を立ち上げた時にサポーターになり五年が過ぎた。登録者に自分の考えをあれこれ押し付けていないか、登録者に寄り添うことができているのかと悩んだ時には、支援室のスタッフと相談しながら、一つずつ乗り越えてきた。

『信じる心』を大切にしている牧野さん。登録者に話しかけた時、返事がなく、理解できているかわからなくても、きっと伝わっていると信じ、かかわり続けてきた。ある時、不安感の強い登録者が勇気を出して、新しいことに挑戦したいと話してくれた。その背中をそっと押すことができ、登録者に寄り添うことができたのかもしれないと思い、嬉しかったのを覚えている。

牧野さんは「登録者を信じることができて、初めて自分のことも信じてもらえると思う。登録者の持つ力を信じて見守ることが大切だ」と語る。

対応を相談する牧野さん（左）

記録する意味

この仕事に就いて七年が経った『磯子区障害者後見的支援室コネクト・ハート』の原さんは「記録は登録者を理解するうえで重要なもの」と語る。

サポーターは、登録者の状態が良い時も悪い時も定期的にお会いし、その時々の様子や気持ちを記録する。また、家族や日中活動先などの支援者にもお会いし、伺ったお話も記録に残していく。

原さんは「登録者との面談を思い出しながら書いた記録を見直し、どうしてあの行動をしたのか、どうしてこんな質問をしたのかと意味を考えていく。これを繰り返していくと、点が線になり、その方のことがだんだんとわかってきた」と語った。

参加者は、それぞれの活動を振り返りながら、サポーターの話に耳を傾けていた。

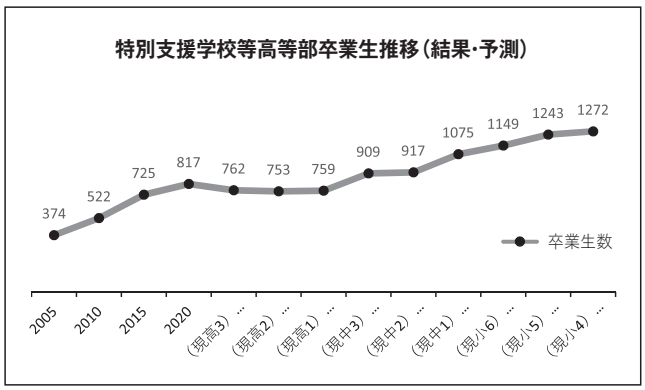
次回、残り二名のサポーターのお話と参加者の感想を紹介する。

面談を記録にまとめる原さん

令和三年度進路対策研究会　調査結果
～コロナ禍の進路決定と今後に向けて～

令和二年度の特別支援学校等卒業生は八二七名となり、二年連続で八〇〇名を超えた。今年度卒業生から三年間は若干減少し、その後は増加が続く。

令和二年度卒業生の進路結果は就労が三十・一%、障害福祉サービス事業所が五十七・三%、進学・その他が十二・六%。昨年度と比較すると、就労の割合が微減、障害福祉サービス事業所の割合が微増した。



◆「進路対策研究会」
委員長 柚木園惇氏（神奈川県立みどり養護学校）より

コロナ禍の卒業生

令和二年四月は緊急事態宣言発令の影響により通常の春を迎えられなかった。六月に登校が再開されても授業時間の短縮や活動の制限を受け、満足のいく学校生活を送ることができなかった。高校三年生の実習においても、例年通りに調整できず、これまでなかった夏休みに実習を行うなど実施時期や期間が流動的となった。多くの生徒や保護者が進路決定に大きな不安を抱えていたと思われる。

そのような状況の中、令和二年度卒業生の進路先は、先に記載した通り多少の変化は見られたものの、例年とほぼ同様の結果となった。事業所や企業の実習では、状況に合わせ柔軟に対応していただき、関係者間では情報交換をより丁寧に行った。生徒や保護者、事業所や企業の努力と協力があったからこその結果だと感じている。

今後に向けて

コロナ禍の結果として、就労の割合は前年比で微減となったが、就労への意向は高まっており、それは、在学生の進路希望調査の結果に表れている。就労希望者が年々増えているだけではなく、福祉サービスの中でも、一番希望が多かった生活介護の利用希望者数を就労継続支援B型の利用希望者数が追い抜いたのだ。

進路決定の現状として、スムーズに決まるケースばかりではない。生徒の障害特性や保護者のニーズ、受け入れ側の環境によって、進路先が偏ってしまうという事情もあり、卒業直前になっても進路先が決まらないこともある。利用したくても利用できる環境が十分整っているとは言えず、進路決定が困難な状況は続いている。

近い将来、特別支援学校等卒業生が千人を超えると言われている。時代の変化に伴い、生徒や保護者のニーズも変わってきている。将来を見据え、障害のある人がより豊かな生活を続けられるよう、学校・福祉をはじめ、社会全体がより一層連携を深めていかなければならないと思う。

※進路対策研究会
昭和五十九年（一九八四年）より横浜市内在住の生徒が通う盲・聾・特別支援学校、養護学校、サポート校、技能連携校、高等専修学校、フリースクール等四十八校（分教室を含めると六十四校）の進路担当者及び行政担当者、教育委員会担当者が集まって進路に関する調査、諸問題の検討を行っている。

障害者自立生活センターIL・NEXT（磯子区）
長谷川　嘉行さん

約八年間ボランティアを続けている長谷川さん。始めたきっかけは、脊髄の難病を抱えた奥さまが亡くなられたことだった。

二十年に渡り介護を続けていたため、「急にやることが無くなってしまった。何か自分にできることはないか」という思いが生まれ、ボランティアに関する情報を集めた。それから、高齢者施設や精神障害者が通う作業所で活動を始めたという。

IL・NEXTを知ったのは、ふとした近所の繋がり。よく自宅の前を車いすで通る人が気になり、挨拶をしてみたことがきっかけだった。少しずつ会話を交わすようになっていくと、近所にあるIL・NEXTに通所している方だと分かった。

その繋がりから、事業所を訪問し、ボランティアとして活動するようになる。現在は週二回、奥さまを介護された経験を活かし、食事・排泄介助や買い物の補助等を行っている。

「障害者は、支援を受ける立場だというイメージがあったが、一人一人の持つ世界や意志を身近に感じ、発信する立場でもあると気付かされた」と話す。日々、利用者さんと関わる中で、様々な刺激を受け、多くの気づきがあるそうだ。利用者さんや若い職員と関わることが、とても楽しいと笑顔で力強く語った。

作業姿の長谷川さん

横浜市障害者地域活動ホーム連絡会
ネットワーク部会の発足

横浜市障害者地域活動ホーム連絡会では、平成二十九年度より機能強化型活動ホームの在り方検討会を開催し、活動ホームの今後の展望を描いていくための検討を進めてきた。その中で、横のつながりをさらに強化することで、より地域のニーズに応える体制を作れないかという思いから、ゆるやかなネットワークを作ることを提案。連携を希望する活動ホームを募り、今年度ネットワーク部会が立ち上がった。

現在、七法人十二館の活動ホームで構成されており、まずはそれぞれが抱える課題を出し合うことから始めている。今回、部会に参加している単館の活動ホームの所長と、複数の活動ホームが連結連合をして一つの法人となった活動ホームの統括所長にそれぞれ話を聞いた。

せや福祉ホーム　津田所長のお話

機能強化型活動ホームの在り方として「地域で必要とされる施設（社会資源）であること」を共通認識としてきた。活動ホーム毎に力を入れる点は様々だが、ネットワーク部会では生活支援を中心に議論を行っている。生活支援は、当事者の生活の充実や家族支援を目的とした大切な事業である。しかし、特に単館の活動ホームでは人員体制の確保が難しく、緊急時の依頼に対応できず、歯がゆい思いをしているところも多い。

そこで、ネットワーク部会でそれぞれの活動ホームの状況を把握することにより、一つの活動ホームだけでは対応が難しい緊急のケースでも、複数の活動ホームで連携をとり受け止められないかと考えている。法人間で職員の応援体制を敷くことができれば人員体制面でも課題解決に結びつくかもしれない。まずは活動ホームを跨いでの職員間の交流や、生活支援事業に関わるハード面を把握し合うことから始めていきたい。

NPO法人るんと　佐藤統括所長のお話

連結連合をしている活動ホームには生活支援事業専任職員が配置されるが、人員体制は充分とはいえず、日中活動の職員を含めて対応せざるを得ない。ネットワーク部会内で連結連合法人同士での情報交換を行ったところ、多様化するニーズを受け止める上での工夫や悩みなど、幅広い情報交換ができた。そこで、法人を越えた繋がりからさらなる地域のニーズを受け止められるよう、専任職員の連絡会の開催を検討している。手始めに二つの法人で情報交換会を開催したところ、それぞれに工夫している点等を共有でき、好評だった。専任職員の動き方やニーズの掘り起こし方等、良いところは互いに取り入れ共有する体制を作りたい。

人員体制やハード面の課題がある中、「一歩踏み出して工夫してやってみる」という言葉が印象的であった。

せや福祉ホームおもちゃ文庫の様子

「あしおとで伝えよう！」
～タップをきっかけに活動の幅を広げる～ジョイカンパニーJ1

今年で三回目を数える横浜市泉区中田地区の音楽祭ナカダカーポ。今回はオンラインで開催され、活動にタップダンスを取りいれているジョイカンパニーJ1（以下J1）の有志が出演した。

J1でタップダンスを活動に取り入れるようになったのは約八年前。趣味でタップダンスをやっていた職員が創作活動として提案し、実現した。最初から全員が積極的だったわけではない。初めてのことに躊躇するメンバーもいたが、楽しそうにステップを踏む仲間の影響もあり、今では、思い思いの楽しみに変化していったようだ。

今も月に二回、NPO法人あしおとでつながろうプロジェクトの「おどるなつこさん」と一緒にタップを楽しむ。コロナ禍の今はオンラインの画面越しではあるが、なつこさんの足さばきとアドバイスを真剣なまなざしで見つめている。

会話の代わりに交互の動作で受け答えを表現するタップの基本「コール&レスポンス」の練習では、みんな独創的なリズムとステップで自分の思いを伝え、仲間の気持ちを汲み取ろうとしている。これからも、各々がタップをきっかけとして人前に出る勇気や達成感を積み重ねてゆく。

息の合ったステップを披露
～ナカダカーポコンサート2021より～

子どもたちの成長を糧に…
広がる活動の場

毎週金曜日の午後、港南区の地域訓練会「なずな会」では書道活動が行われている。教えているのは居原田礼子さん。活動開始から今年で二十七年目を迎える居原田さんにお話を伺った。

居原田礼子さん

子どもたちと共に歩む日々

一九九六年の春、「なずな会」の保護者から「お習字を教えてもらえないか」と声をかけられた。「軽い気持ちで引き受けたが、障害のある子どもたちとどう接したらいいのか最初はわからなかった。何もできないまま活動時間が終わり、落ち込むことばかりだった」と話す居原田さん。

試行錯誤を繰り返す中で、大きな紙に詩を書いてもらったら、個性豊かで素敵な作品ができあがった。そこからは、一枚を書き上げる集中力を養い、子どもたちが達成感を味わうことを指導の目標にした。今は、一人一人のイメージに合わせて居原田さんが詩を作り、生徒たちが筆で書き上げ、見る人の心を惹きつける素晴らしい作品を生み出している。

「教え方の引き出しが増えた。子どもたちの成長していく姿が嬉しい。成長しない子はいない。絶対大丈夫」と力強く話す居原田さんの表情は輝いていた。

広がる活動の場

六月に上映された話題の映画『漁港の肉子ちゃん』をご存知だろうか。アニメ本編のシーンに「なずな会」をはじめとする居原田さんが指導している生徒たちの作品が登場する。居原田さんとプロデューサーとの偶然の出会いから子どもたちの作品は新たな発表の機会を得た。居原田さんは「いろいろなご縁がつながってここまできた。障害のある方の作品としてではなく、作品の良さが伝わったのだと思うと嬉しい」と語った。

書道活動を通じて

「なずな会」に所属するご家族にお話を伺った。

居原田先生と宮永さん

宮永さんは書道を始めて九年が経つ。「最初は落ち着かなかったが、続けるうちに集中力がつき、書ける文字も増えた。まさか映画に登場することになるとは想像もつかなかった。世界が広がった」と笑顔で話す。「居原田先生は一人一人に丁寧に寄り添い、子どもの成長を一緒に喜んでくれる。それがとても嬉しい」とのこと。

居原田先生と松田さん

同じく「なずな会」の松田さん。書道は今年で七年目。「居原田先生は褒め上手。子どもがどうしたら書けるようになるかということを一番に考えて、子どものやる気を引き出してくれる。否定するのではなく、その子を認めつつ、何回も何回も諦めずに関わってくれる」と居原田先生への思いを語った。

居原田さんと生徒の皆さんの温かな交流、共に成長する姿が印象的だった。

ぼくのわたしのすきなこと Enjoy your life

ごぼうハウス（港北区）
佐藤正樹さん

「同い年の選手を見ると、自分も頑張らなきゃと思う。好きなことがあるからこそ、仕事も楽しめる！」と素敵な笑顔で語ってくださった佐藤さん。

十五歳のときから「リーグ「川崎フロンターレ」の熱烈なサポーター。古くから熱心なファンであったお父様の影響で試合を観戦し、虜に。

試合があれば、千葉、仙台、名古屋など日本各地のスタジアムに家族で足を運んできた。

柏スタジアムでの観戦

「リーグで初優勝した二〇一七年の試合は一生忘れられない。これまで、リーグ他、五回優勝をしてきているが、チームとして勝てない時代もあり、悔しい思いをしてきた。その時のことをバネにして、今がある。山あり谷ありという言葉のとおり、ずっと見守ってきたチームに、自分の人生と重なるところがある。」と熱い思いを話された。

現在は、新型コロナウイルス感染予防のため、テレビ観戦の日々だが、またスタジアムで歓声を響かせる日を楽しみにしている。

胸に刻まれた星が優勝の証

よこはま障害者共同受注総合センター 受注センター わーくる通信

六月二十七日、ニッパツ三ツ沢球技場場外の広場にて、Jリーグの横浜FC対清水エスパルス戦の試合開始前に、市内障害者事業所六ヶ所がわーくるの調整で出店した。

コロナウイルス禍での貴重な機会

この機会は、横浜FCを運営する株式会社横浜フリエスポーツクラブがシャレン！（社会連携活動）の取り組みの一環として企画し実現。昨年からコロナウィルス禍の影響で地域のイベントなどの中止が増えていた中、貴重な出店の機会となった。

クラブ担当者の長嶋さんによると、事前にクラブHPやSNSに情報を掲載し、活動を周知。そのかいもあってか、どの事業所のテントにも多くのファンが立ち寄った。

販売時の様子

出店事業所の一つ、ゆうゆう（金沢区）は用意した百五十個ものクッキーがほぼ完売。職員の白田さんは「コロナで販売が減っている中、今回の機会をいただけて利用者さん達がクッキーを焼くお仕事が日中に出来た事が良かったです」と喜んだ。

ゆうゆう（左）・クローバー（右）

クローバー（中区）では「接客でのコミュニケーションが参加したメンバーにとって貴重な良い経験になった」とのこと。利用者さんは「次回機会があれば、その時の対戦チームカラーの商品なども作りたい」と意欲を語った。

この日、天気予報では雨天だったのが、参加した事業所の出店への思いが通じたのか、曇天のまま盛況で販売を終了し、次回を期待する声が上がった。

賑わっている出店会場

横浜FCの今後の取り組み

長嶋さんは「ファンの方々からはとても良い反響をいただいている。この活動で、利用者の皆様にとって、横浜FCにかかわることやスタジアムに来場される方々との交流が、何かのきっかけになったら嬉しい。これからも地域の事業所との取り組みを継続していく」と、その意義を話す。

わーくるでは、今後も多くの事業所へ機会を提供できるよう、横浜フリエスポーツクラブの取り組みと連携していく。

あゆみ荘だより

一階多目的トイレにユニバーサルシートを設置しました

横浜あゆみ荘の機能回復訓練室前の多目的トイレに、折りたたみ式のユニバーサルシートを設置しました。

ユニバーサルシートとは、大人も横になれる大型のシートです。乳幼児等のおむつ交換だけでなく、障害のある方のおむつ交換にも利用されるほか、高齢者や子供連れの方など多くの方が多目的に利用する事ができます。

安心して横浜あゆみ荘にお出かけいただける一つのきっかけになればと願っております。

ユニバーサルシート

より便利になる横浜あゆみ荘 ～ネット予約開始へ～

スマートフォンやパソコンから、横浜あゆみ荘の宿泊予約ができるようになります。

ネット予約の特徴は、二十四時間予約ができることや、様々な宿泊施設と比較ができることにあります。横浜あゆみ荘は、浴室にリフトがあり、ミキサー食やアレルギー食に対応するなど大きな特徴があります。旅行予約ウェブサイトを訪れた方に、横浜あゆみ荘のホスピタリティや設備、食事、お風呂等をアピールし、新規のお客様が横浜あゆみ荘を予約しやすい環境を作ってまいります。また、二十四時間予約が可能ですので、すでに横浜あゆみ荘をご利用いただいている方にもメリットがあるかと存じます。

今回、初めてでもあることから宿泊プランを少数に絞ります。今後はお客様のご意見を参考にしつつ、宿泊プランを充実させてまいります。

旅行予約ウェブサイト「じゃらんnet」の横浜あゆみ荘宿泊プランを、是非、閲覧いただき、ご意見をお寄せいただければ幸いです。

お問合わせは、横浜あゆみ荘まで
☎045(941)8383

読者アンケートご協力のお願い

ご協力よろしくお願い致します

ご意見、ご感想を今後の紙面づくりの参考とさせていただくため、ぜひ、ご協力をお願いします。

https://forms.office.com/r/6hKUkEk9vw